

自然誌 だより

Natural history

秋

三重自然誌の会情報誌 130 号

2021年 12月

押しよせる野生

熊野市の実家で車庫のペンキ塗をした帰途、国道311号沿いの休耕地でシカではないずんぐりした動物を見つけました。車を駐めて近寄ってみるとカモシカで、写真を撮っても逃げ出すそぶりを見せず、ジッとこちらをみていました。しばらくすると、迷惑そうにゆっくりと遠ざかっていきました。途中で放尿までして(写真)。シカやサル、イノシシの人里への進入は顕著ですが、カモシカよ！お前もか、というところでしょう。私は1958年生まれで、高校生までは熊野市紀和町で過ごしました。春夏秋冬、自然と生きものを遊び相手に、今にも増してワイルドなライフを楽しんでいましたが、山にカモシカはいませんでしたし、シカやサルもみたことがありませんでした。ところが、家を離れてときどき帰省すると、サルが畑のダイコンを食べに来るようになっていました。当時は、農家の人もサルに同情的で、こいつらも山に餌がないのでかわいそうと、被害にもそれほど立腹していませんでした。今から40年程前のことです。その後の趨勢は

ご存じの通りで、今、無人となった実家の周りはシカの糞・イノシシの堀痕だらけ、栗はサルの餌、床下にはアナグマが棲みつこうとします(写真)。また、松阪市の自宅でも、今秋に初めてシカの嘶きを聞きましたので、団地内をシカが闊歩する日も遠くはないでしょう。野生は容赦ないようです。



写真 左：国道沿いで採餌・放尿中のカモシカ（2021年11月13日、熊野市紀和町矢ノ川）、右：軒下への出入り口をふさがれて困っているアナグマ（2021年3月7日、同町大栗須）

（清水善吉：松阪市日丘町1386-17）

野性に翻弄さる

上 田 利 彦

数年前から、熊野市において畑地の管理をしているが、そこでの獣害について記しておきたい。

畑は南東に向いた斜面にあるこの土地ならではの段々畑で（写真1）、ビワ、プラム、カキ、クリなどの果樹が植えてある。後背地が山林なので獣害は避けられない。主として年中を通して夜間やってくるニホンジカ（写真2）によるもので、冬季には皮剥ぎによる樹木の枯死が誘発される。ビワの木は1年で壊滅状態に追い込まれた。春から夏にかけては果樹の新芽や若葉を食べるため枝を折られるなどの被害が頻発する。このため、なんとか被害を軽減しようと畑地を囲んで電柵を設置しているが、毎週畑のあちこちに新しい糞がばらまかれている。トレイルカメラによる調査により、彼らは首が通るわずかな隙間を探し出してはスルリと抜けて入り込み、畑を闊歩する姿が確認できた。このため、毎週末の電柵の管理が我が家の「畑仕事」となっている。しかしながら、先週はここ、今日はここ、と馳ごっこが現状である。

そんな中、今年の8月21日、いつものように電柵の管理と除草に出向くと、クリの木畑のあちこちにまだ青いイガが剥かれた状態で転がっていて、その周辺には白いクリの皮も散らばっているのを確認した。その状況からニホンザルによる被害であることは明らかであった。さらに、被害はそれだけではなく、まだ青いカキの実まで齧られて転がっているのを確認した。昨年カキの収穫が全くできなかったのは消毒をしなかったため実る前に落ちてしまったものと考え、今年は、殺虫・殺菌の消毒もし、秋の収穫を楽しみにしていたところだったのに、見事に夢打ち砕かれてしまった形である。

カキは色づく前に全滅させられたが、クリはその後も群れの来襲を受けたものの、サルの空腹を満



写真1 電柵で囲った段々畑



写真2 夜間、レンゲソウを食すニホンジカ



写真3 クリを食すニホンザル

たす以上に実り、9月中旬に昨年の半分ほどではあったが収穫ができた。かろうじて我が家で食べる分はなんとか確保できたので不幸中の幸いではあった。しかしながら、まだ実が青いうちから食害に遭うとは想像もしなかった。トレイルカメラに映った映像では、木に登りイガのついた枝を折り下に落とし、地上に降りてきて手と歯でイガを剥きクリを取り出している姿が確認できた（写真3）。手も唇も痛くないようで、さすが野生と感心しきりである。これの防除は、毎日見回りするか、果樹を網で覆うしか手立てはなく、ウィークエンド・ファーマーとしては、「これが自然と共存・共生すること」と諦めるしかないようである。なお、9月にクリを収穫しているとき、近くの木の上で数頭のサルが見張りをしていることに気付いたので、あらかじめ用意したBB弾のライフル型モデルガンを持ち出し見せつけたところ一目散に逃げ去った。しばらくはこの手が使えそうではある。（うえだ としひこ：津市久居一色町176-1）

三重県におけるリュウキュウウノアシおよびハナワレイシの記録

中 野 環

新型コロナウイルスの影響で、2021年の調査回数は例年の1/3程度でしたが、調査に行くと何らかの発見があるものです。本報では、興味深い2種について報告します。

2021年4月10日に紀北町の港で、係留ロープについたマガキに付着した小さなリュウキュウウノアシ *Patelloida saccharina* (Linnaeus, 1758) と思われる個体を採集しました。リュウキュウウノアシは、奄美諸島以南の潮間帯に生息する殻長約35mmの傘型の貝類です(奥谷2017)。房総半島以南に生息するウノアシ *Patelloida lanx* (Reeve, 1855) との区別は難しいとされます(中村1986)。両種は亜種関係にあるとされたり(波部・小菅1981, 中村1986)、ウノアシの表現型(リュウキュウウノアシ型, ウノアシ型)とされることもあります(行田2003)。今回は、従来の分布域から大きく離れた場所での確認ですので、見つけた時は目を疑いましたが、貝殻は白色の地に黒褐色の山形模様が明瞭であること、貝殻内面はウノアシのように黒色で縁取られていない特徴からリュウキュウウノアシと同定しました。残念ながら係留ロープは陸揚げされてから時間が経過していて軟体部は乾燥していた上、わずか1個体の採集です。今後、複数個体の採集を試み、ウノアシとリュウキュウウノアシを別種として扱うか、同種として扱うべきか考察したいと思います。

2種目は、ハナワレイシ *Nassa francolina* (Bruguier, 1789) です。本種は、紀伊半島以南の潮下帯に生息する巻貝です(奥谷2017)。これまで三重県では、紀北町紀伊長島や三浦で採集された記録はありますが(松本1979)、松本幸雄コレクションには含まれておらず(中野・松本2021)、三重県産の個体の所在は不明です。2021年11月14日に紀北町で操業されたイセエビ刺し網漁で1個体を得ました。生きた個体でしたが、網から外す際に取れたのか、蓋は失われていました。過去には記録のある種ですが、現存する三重県産個体として報告します。

データ

リュウキュウウノアシ 紀北町, 2021年4月10日採集, 殻長:8.5mm (写真1)

ハナワレイシ 紀北町, 2021年11月14日採集, 殻長:39.5mm, 殻幅:20.8mm (写真2)



写真1 紀北町産リュウキュウウノアシ(中野環コレクション:TNC-Mo. 20846)



写真2 紀北町産ハナワレイシ(中野環コレクション:TNC-Mo. 20832)

引用文献

- 波部忠重・小菅貞男1981. 原色世界貝類図鑑Ⅱ 熱帯太平洋編. 保育社, 194pp.
松本幸雄1979. 三重の貝類(三重県産貝類目録). 鳥羽水族館, 179pp.
中村 宏1986. ユキノカサガイ科. 奥谷喬司(編・監修), 決定版 生物大図鑑 貝類, 38-40.
中野 環・松本至人2021. 三重の貝類を追求した人生〜松本幸雄〜(松本幸雄コレクション 貝類標本目録). 儀一屋(環), 97pp.
奥谷喬司(編著)2017. 日本近海酸貝類図鑑 第二版. 東海大学出版部, 1375pp.
行田義三2003. 貝の図鑑 採集と標本のつくりかた. 南方新社, 174pp.

(なかの たまき: 度会町大野木1711-1)

昆虫採集と自然観察会

清水 善吉

八重田池畔にある事務所に時々会員さんの来訪があり、いろいろな情報をもってきてくれます。先日、中西元男さんが持参されたのは一枚の写真、伊勢志摩国立公園の看板で、神島で撮影されたそうです（写真1）。サシバとアサギマダラの写真が大きく掲載されており、神島でこの被写体は当たり前であろうと訝しがっていると、下の方の小さな文字を読めと言われる。虫眼鏡を取り出して覗くと、そこには次のように書かれていました。

守っていただきたいこと Notes

花を採らないでください

Do not pick wildflowers or damage plants

動物を獲らないでください

All wildlife is protected from hunting or harassment

野生動物に餌を与えないでください Do not feed animals

自然を大切にしよう Care for nature

また、各項目の頭にイラストがついており、「動物を獲らないでください」にはチョウを捕虫網で採る図柄に斜線を引いています。知られているように、神島はアサギマダラ・マーキングのメッカですので、その調査を規制するようにとれます（中西元男2021；ひゃくとりむしNo492）。神島は国立公園には含まれていますが、動植物の採集規制のない「普通地域」でした。一切の採集が禁止される「特別保護地区」に変更されたのかかもしれないと思い、志摩自然保護管理事務所に電話で問い合わせたところ、普通地域のままでした。また、あの看板は「マナーをうったえるもの」と教えてもらいました。マナーとは「行儀・礼儀・作法」のことですので、神島で昆虫や植物を採集するのは行儀が悪いのです。役所が一方的なマナーを主張することに違和感がありますし、看板を見た人が採集は違法と捉えるのは間違いありません。また、日本語と英文で意味が違う、いわば怪看板ですので、撤去すべきだと思います。このケースは、自然を大切にしましょうPlease respect the natural environmentだけでよかったのではないのでしょうか。

では、昆虫や植物の採集がいつからこのような位置づけ（マナー違反）になったのでしょうか。古い資料ですが、日本自然保護協会1973年発行の「自然保護No137」が手元にあり、自然観察会の特集がされています。その巻頭に「自然観察会の普及を」（矢野亮）という文があり、没頭に「数年前より、児童生徒の夏休みの宿題から昆虫採集や植物採集がはずされたことは、大変結構なことだと思います。」とあります。「採集教育から観察教育へ」（同誌No130）という同会の活動の成果であったようです。採集否定の教育を受けた人々が社会の一線で活躍している昨今ですので（博物館学芸員も例外ではない）、神島の看板のようなことが生じるのでしょうか。このような社会の風潮に対して、採集の意義・必要性を丁寧に説明していくべきなのとは言ってもありません。

さて、矢野は上述に続いて「しかし、ゆがんではいたものの、生物採集は子供たちにとって自然に接する唯一の手段でした。」と記し、子供たちが自然と遊離してしまうことを危惧して、「自然観察会」の普及を提唱しています。自然観察会をイベントとしては否定をしますが、自主的で継続性のある昆虫・植物採集とは別物で、代替には無理があります。しかし、同会の戦略は巧みであり、会員・寄付サポーター45000人を擁する国内最大規模の保護団体として世間の支持を得ていることは間違いありません。また、各地で講習会を開催することにより「自然観察指導員」なる人材を養成し、組織化しています。指導員の講習では、星を眺めて「あの星のことを知るのに採りたいという人はいませんよね」などと意味不明の説明が行われたとも聞いています。「採集」という敵をつくって攻撃する、昨今、世



写真1 神島に設置されている看板（一部）。中西元男・提供

界中で行われている手法と類似しているように感じます。

自然観察会が子供たちの自然離れ防止に役立つかは疑問ですが、悪いものでもないと思っています。実際、当会でも設立後10年間は県内各地をフィールドに開催してきました。参加した子供も大人も楽しそうに一日に過ごしてくれますが、それだけなのです。当会では採集を否定するのではなく、自然観察会をきっかけに昆虫少年たちが育つのを期待していました。しかし、採集否定から出発した自然観察会ですので、無理筋の期待であることは、少し考えればわかることです。自然観察会は、これからもサービス産業として発展していくでしょう。一方、採集については、生物多様性の解明と保護には不可欠の行為であることは明らかなですが、担う人材の枯渇は深刻です。その解決の一步として、子供たちの生物採集を否定するのではなく、むしろ奨励すべきものとして再評価されるべきです。その役割を果たせるのは博物館においてはありません。全国の博物館の皆さん、期待しています。

私はネズミ採集が趣味です。行儀悪いと言われることは気になりませんが、自然界の一部を個人所有することには引っかけがありますので、得られたデータは公表し、標本は後々の人たちにも利用してもらえるように公共機関に寄贈する予定です。

(しみず ぜんきち：松阪市日丘町1386-17)

ゴホントゲザトウムシ三重県の記録

篠 木 善 重

ゴホントゲザトウムシ *Himalphalangium spinulatum* (ザトウムシ目マザトウムシ科) は、歩脚がやや短く、腹部背面中央に5個の短い棘が並ぶ体長10mm内外の大型種で、環境省のレッドリスト (2012) では情報不足 (DD) 種となっている。三重県の既知の記録は、槌賀 (1938) がトゲオホザトウムシの和名を使って伊勢神宮から初記録しているが、リストのみなので採集データは不明である。三重県のザトウムシ類をまとめた鶴崎 (2009) も鈴鹿山脈での調査を行っているが、本種は確認できていない。筆者は津市といなべ市で本種の生息を確認しているので報告する。

津市での発見は、丘陵地を開発した住宅団地の中、民家玄関の壁面。蜘蛛の一種かと思い、採集せずに写真撮影のみ行った (写真1)。後日、画像を確認したところ、本種の亜成体と判明した。現地は住宅と隣接する急斜面の竹林を伴う雑木林が直近に伐採作業されたばかりで、発見個体は生息地から逃げ出した個体と思われる。

本種の生息地は平地の人家周辺の丘陵地に限られ、生息地は散発的であるが、いずれもモウソウチク林または竹林をとまなう雑木林であることが多く、成体は5・6月頃に出現するので (鶴崎2009)、人家周辺の丘陵地を搜索すれば、今後新たな生息地が見つかることが期待される。

データ

津市半田, 1頭 (亜成体), 24-IV. 2021, 筆者撮影 (写真1)。

いなべ市北勢町賀毛神社, 1頭 (体長約11mm), 12-VI. 2021, 筆者採集 (液浸標本, 写真2)。

謝辞：賀毛神社へ同行していただいた川島淑子氏 (いなべ市) に感謝申し上げる。

引用文献：槌賀安平1938. 伊勢神宮々域の蜘蛛類. *Acta Arachnologica*, 3 (2) : 59-65.

鶴崎展巨2009. 三重県のザトウムシ類. *しのびぐも*, (36) : 29-35, 三重クモ談話会.

(しのぎ よししげ：津市河芸町中別保2230-1)



写真1 ゴホントゲザトウムシ亜成体 (津市半田)



写真2 ゴホントゲザトウムシ液浸標本 (いなべ市北勢町)

晩秋に抱卵しているキジバト

今 堀 聖 史

小春日和が続く暖かい11月中旬、鳥見仲間と雑木林の遊歩道を歩いていました。キジバトが細い枝を咥えて道端の木の枝に飛び上がり、2mほど横に移動して枝葉が込み合った所で止まり動かなくなりました。道から約4m、高さ3mほどの所でじっとこちらを見ていました（写真1）。双眼鏡で枝葉が込み合ったところを覗くと巣の一部と思われる細い枝が重なって見えます。巣のようですが、動きがないので他の鳥を探しに行き、昼食を済ませた後で再び立ち寄りました。道に近い枝で一羽が羽繕いしていて、巢らしい込み合った葉のすき間から別の一羽が座っている尾羽が見えます（写真2）。手前の枝にいる1羽は先ほどまで抱卵していて、交代して羽繕いしているのではないかと推定しました。「暖かいといっても11月に抱卵して、ヒナを育てられるのかな？」と心配する人、「キジバトは年に何回もヒナを育てるそうよ」とベテランの声。キジバトが晩秋に抱卵しているようすを観察できてラッキーでした。

キジバトの繁殖は年1～8回までと個体差があり、4～5回が多く、1回に2卵を生み、昼間はオス、夕方から朝までメスが抱卵、巣は小枝を材料にした皿状で、オスが巣材を拾ってメスに渡して主にメスが巣を作る、と文献にはあります。すき間の多い粗雑な巣で（写真3）、寒い時期に卵を無事に温められるのか心配です。今回観察した巣は横に生えているカクレミノの葉が2～3枚敷いてあるように見えました。キジバトはもともと低山や里山に多く生息し、ヤマバトと言われて唱歌にも登場していました。1960年頃から分布を広げ、現在では街中の公園や民家の庭でも繁殖しています。キジバトのオスが電線やアンテナで“デデッポーポー”と繰り返して鳴いて縄張りを守っていることがあります。縄張りは約150m四方だそうで、鳥の動きに気を付けていると営巣しているのが判るかもしれません。そっと見ていると面白い場面が見られるかもしれません。百聞は一見に如かず、です。

文献：亀田佳代子2006. Bird Research News, 3 (8).
和田 岳1994. キジバトの繁殖期. 野鳥, (571).



写真1 キジバト（2021年11月10日，鈴鹿市青少年の森）



写真2 抱卵中のキジバトのつがい。手前の鳥のうしろに抱卵している鳥の尾羽（↓）が写っている（2021年11月10日，鈴鹿市青少年の森）



写真3 キジバトの巣。2010年10月（津市久居東鷹跡町・民家の庭）

（いまほり きよふみ：津市久居小野辺町1454-30）

鈴鹿青少年の森湿地の整備作業

毎冬恒例の作業です。この作業は、20年近くにわたって当会で細々と行ってきましたが、数年前から鈴鹿青少年センター主催で実施されています。おかげで、鈴鹿市民の参加も増えて、湿地植物は大喜びの状況です。植物への影響を考慮して酷寒期の作業ですが、草花たちのために一汗かきませんか。参加希望の方は、当会に連絡頂くか、同センターに直接申し込んでください。

日時：1月25日（火） 13時～（2時間程度）、服装：長靴、軍手、ドロドロOKの服装

環境影響評価書の評価

河 北 均

環境影響評価準備書及び評価書は環境影響評価法に基づき大規模開発にあたって環境への影響を調査・予測・評価した文書です。自然科学をベースにした行政文書に近い性格の文書です。このなかに動植物の調査結果があります。このデータが文献引用できるかどうか、つまり論文報文と同様かもしくはそれに準じた取り扱いができるかどうかということですが、いかがなものでしょうか。



私は「みえ生物誌」の担当した分野において、「文献……資料に十分な信頼性がない環境影響評価書、高校生物部誌あるいは採集記、講演要旨などは原則として除外した……」と記して文献引用は避けました。資料に十分な信頼性がないとだけ簡潔に述べたのみであるので、詳細について問題点を述べてみたいと思います。

- ①著者名が事業者名（会社名）です。環境影響評価書作成は事業者が環境コンサルタントの会社に委託してその会社員が執筆作成するが、環境影響評価書には執筆者の名前どころか環境コンサルタント名すらありません。実質的執筆者は環境影響評価書のどこにも記されておらず、文責の所在が不明確です。
- ②環境影響評価準備書は事業者から関係都道府県知事へ少部数が提出され、関係都道府県知事が公告し、関係地域内において1ヶ月間縦覧されます。一般には閲覧する機会も入手する機会もほとんどなく、サーキュレーションが極めて悪いために論文報文に準ずる扱いにするには問題があります。
- ③疑わしい同定がされた環境影響評価書が散見されます。例えば、某環境影響評価書には紀伊長島町の山林で採集リストのなかにタッパンルリシジミとエゾエンマコオロギの記録があります。別の環境影響評価書では磯部町の内陸部の里山でハマスズが記録されていました。これらは昆虫の初心者でも誤同定だと分かるレベルです。おそらく調査した環境コンサルタントに昆虫の分野が分かる人がいなかったのでしょう。

以上3点であるが、この3つは連動しています。本稿を草するにあたり、念のため、③の該当環境影響評価書を再確認しようと思いました。ところが、現物の入手どころか閲覧することもできませんでした。古書店でも取り扱っておらず、公立図書館を探しても見つかりませんでした。つまり、②で指摘したサーキュレーションが悪いことが影響しています。仮に見つかって、内容について質疑しようにも①で指摘した実質的執筆者は不明で文責の所在が明らかではありません。これは致命的です。

環境コンサルタントにはハイレベルの優秀な研究者が多いのですが、彼らが自身の論文報文に環境影響評価書を文献引用することはないようです。つまり、実質的執筆者が正式の自然科学論文報文だと考えていないのでしょう。また、環境影響調査で得られた資料を実質的執筆者が正式の自然科学論文報文として報告されることもあるようです。調査不足や誤同定の環境影響評価書と精査された環境影響評価書を同一に見られたのでは、環境コンサルタントの優秀な研究者はたまったものではありませんが、著者名が事業主体なので、誰かわからず、客観的には同じレベルと判断されても仕方がないでしょう。

以上、環境影響評価書は行政文書相当であり、自然科学文書相当ではないということです。

（かわきた ひとし：伊勢市岡本1丁目17-18）

三県交流フィールドワーク参加で確認した生きもの

筆者は、3県交流フィールドワーク（2018年護摩壇山、2019年和佐又山）に参加し、また、途中でも観察も行ったところ、若干の動植物を確認したので報告する。なお、いつも特徴的な環境地域を選定してくださる各県の幹事に感謝する。

アイノミドリシジミ、2♂採集；クモキリソウ、観察（和歌山県田辺市竜神村竜神_護摩壇山、2018年7月15日）。スジクワガタ、1♂目撃（同県かつらぎ町花園梁瀬_守口ふるさと花園、2018年7月16日）。ミヤマカラサアゲハ、2♂1♀採集；コジャノメ、1頭採集；ミヤマダイコクコガネ、1頭目撃（奈良県上北山村西原_和佐又山、2019年6月29日）。ウチョウラン、観察（写真1）；ベニシュスラン、観察（写真2）；クモキリソウ、観察（同県下北山村前鬼_不動七重滝、2019年6月29日）。シシンラン、観察（同県上北山村小椋_水分神社、2019年6月30日）。

（長谷川 好昭：鳥羽市鳥羽1丁目23-4）



写真1 ウチョウラン



写真2 ベニシュスラン

奥香肌峡生物相調査団の結成 ～調べて残そう奥香肌峡～

奥香肌峡は、三重県の中央を東流して伊勢湾にそそぐ櫛田川の源流域に位置し、北は高見山(1249m)から三峰山(1235m)に連なる三峰山地、西は高見山から池小屋山(1396m)に至る台高山地、南は江股の頭(1270m)や迷岳(1309m)と、三方を山に囲まれた地域です。

台高山地南部の大台ヶ原や大杉谷と比べても決して遜色のない生きものが暮らしていると思われるのですが、三重県立博物館が1974年に刊行した「三重県立博物館自然科学調査報告書第5報 台高山脈北部ならびに奥香肌峡一帯自然科学調査報告」が唯一の関連資料です。この報告には、哺乳・爬虫・両生類や昆虫、貝、植物それに地形・地質について、1年間の調査結果が掲載されています。しかしながら、刊行から半世紀を経ても改訂されていないのは、県内の自然情報を蓄積することを目的とする本会としては看過してはならない状況と言えます。

そこで、表題の調査団を結成して調査を行い、報告書を刊行することを会員の皆様に提案する次第です。もちろん、この地域で計画されている巨大風力発電の動きに触発されてもいますが、それはそれとして、本会としては自然誌資料の収集を主眼に活動していきたいと思います。2022年から2～3年ほどかけて現地調査を行う予定です。手弁当（死語か？無償という意味です）での調査となりますが、参画いただける方は本会事務局までご連絡下さい（文責・清水）。

（発起人：河北均・中西元男・清水善吉・山本和彦）

事務局から

○2022年会費の納入を御願います。

編集後記

長谷川さんの記事で、この2年間は交流フィールドワークが実施できなかったことを実感しています。来年こそはと思っているのは私だけではないですよ、冬号は3月発行予定ですので、多くの投稿お待ちしております（善）。

自然誌だより130号 Mie Natural History Research Group News, No.130

発行日 2021年12月17日

事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17

清水善吉方 三重自然誌の会

<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会

郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会

年会費 1,500円（個人）/2,000円（家族）

e-mail:shumizuzenkichi@gf7.so-net.ne.jp